

「村は悪霊に悩まされて  
いる。先週も1人死んだ」

1999年9月タイの  
ケンケン大学で打ち合わせ  
をしていると、偶然居合わ  
せた清掃員が教えてくれ  
た。以来、その村を主要な  
フィールドとして、精霊と  
呪術師をめぐる文化人類学  
の研究を進めている。

文化人類学は世界の人々  
の文化や社会を探求する学  
問で、フィールドワークと  
参与観察が方法論である。  
対象地域に1年から2年ほ  
ど滞在して、現地の人々と  
ともに暮らしながらデータ  
を集め、それを民族誌にま  
とめるのが一般的な手法で  
ある。

## 精霊や呪術という文化的想像力

仰しているが、日本と同じく、他の宗教や信仰も入り交じっている。バラモン・ヒンドゥー教やアニミズムが日常生活のあちこちに見え隠れする。たとえば「ピー」と呼ばれる精霊が病や災厄の原因とされることもあれば、村に住む呪術師がさまざまな呪術を駆使して悪霊を払ったりもする。

また精霊「ピー」の表象のあり方も興味深い。古くから絵巻物に描かれた日本の妖怪とは異なり、タイの「ピー」が活発に凶像化されるようになったのは、第2次大戦後のことである。1970年代と呼ばれる粗悪な冊子に、猥雑に描かれた「ピー」の漫画は人気を集めたが、70年代に反共政策のもとで検閲の対象になる。「ピー」という異形は、現実世界の他者「敵」と同一視され、秩序を揺るがす存在として覆い隠される。冷戦構造が収束した90年代以降には、「ピー」を題材とした映画やドラマが増える。

たとえばタイに「ナンナーク」という有名な悪霊がいる。19世紀末のバンコク郊外に実在したとされる女性「ナーク」は、夫「マーク」の出産中に産気づき、難産のす

え非業の死を遂げる。「ナーク」は赤子とともに幽霊と化すが、知らずに帰還した夫と元の生活を続けようとする。やがて夫は妻の異変に気付き逃亡を図るが、「ナーク」は夫を追い続ける。そこに現れた呪術師が「ナーク」の霊を払おうとするが失敗して殺され、最後にバンコクから来た高僧によって「ナーク」は説得されて調伏されるというストーリーである。これまでに何回も映画やド

# タイの精霊「ピー」と

# 悪霊「ナンナーク」

筆者はタイ東北部を中心  
に人々の宗教生活を研究し  
ている。タイでは9割を超  
える人々が上座部仏教を信



名城大学外国語学部  
国際英語学科教授  
津村 文彦

つむら・ふみひこ 文化人類  
学、東南アジア地域研究。博士  
(学術、東京大学)。1974  
年生まれ。

ラマで上演されてきた。この物語は単なる怪談ではなく、近代タイの歴史の一面面を反映したものと解釈できる。19世紀末に近代国家「シャム」が建設されるなかで、仏教が国教化され、地方のさまざまな信仰を飲み込んでいった。呪術師が制圧に失敗した悪霊を、最終的に仏教が支配したことから、近代化の過程における国家宗教と地方伝統との権力関係を読み取ることができるだろう。

